

令和元年6月15日現在

機関番号：32683

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K17197

研究課題名(和文) 子どもを鍵とする社会像の問い直し：年少者像の再編期の歴史社会学と現代の変容の記述

研究課題名(英文) Are Children and Childhood Keys to Society?: A Historical Sociology of Wartime Reconstruction and Contemporary Changes of Childhood

研究代表者

元森 絵里子 (MOTOMORI, Eriko)

明治学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：60549137

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「子ども」とその教育が社会の存立に関わるという、社会学も「社会化」という形で理論化してきた素朴日常的な感覚を、社会意識と制度の関係に焦点をあてて問い直す研究の一部である。本研究期間では、第一に、欧州の子ども社会学の展開の紹介と批判的検討から、歴史記述の理論枠組を練り上げ複数の論文を発表した。第二に、理論枠組と往還しながら、日本において、この感覚が諸制度に組み込まれた後に揺らいだ時期として、総力戦体制下の動員・疎開の事例と、子ども観の再編の意図と新自由主義的風土の交錯する現代の子どもの権利擁護活動の事例とを調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

翻訳と学会の特集等を利用して、英国子ども社会学の展開を紹介すると同時に、日本の研究状況を反省し今後の子ども社会学研究の道筋を示す論文を複数執筆した。それによって、子ども社会学や教育社会学の分野に新しい研究視角をもたらしたと考えている。国際学会では、日本の事例と理論的関心を結びつけた報告で、一定の評価を得た。社会的には、このような旧来の社会運動の語彙とは異なる新たな視角を、実践現場であるフィールドワーク先に還元していくようにしてきた。これらにより、既存の子ども像・社会像を相対化して現実的に語り実践する基盤の構築と、解放的な社会と生の理論の基礎づくりとを目指している。

研究成果の概要(英文)：This study is part of a bigger project that reconsiders our conception of childhood: children and childhood are keys to our society. By following networks of the discourse, knowledge, institutions, and daily activities, this research tried to deconstruct the conception of socialization, which has been propagated by sociologists. First, I tried to introduce a European trend known as the new wave of childhood sociology and my own critical reading of it, elaborating my own framework to show alternative views on the modernity of childhood. Second, I conducted empirical studies on periods of reconstructing childhood in Japan: wartime student mobilization and pupils' evacuation as well as a few contemporary local activities regarding children's rights in the context of new public management.

研究分野：歴史社会学

キーワード：子ども社会学 歴史社会学 子ども史 構築主義 身体の社会学 言説史 子どもの権利 戦争社会学

1. 研究開始当初の背景

(1)社会的背景

「子ども」とその教育等の処遇が重要であり、社会の存立に関係しているという感覚は、子ども関係諸学や現場における日常的な直観であるのみならず、社会学においても、子ども期の「社会化」を社会の存立の鍵の1つとするという形で前提とされてきた。しかし、この感覚自体が歴史的なものでありえるし、事実なのか言説なのかには留保が必要だろう。

何より、子どもが関わる事件に際して繰り返されるモラルパニックや、教育改革論議を見ても、この図式自体が多様な生を排除し、ある図式に人生をあてはめる道徳的偏狭主義につながる懸念もある。また、格差社会と呼ばれる時代背景のなかで、子ども = 依存 / 大人 = 社会的自立のようなモデルを杓子定規にあてはめ、自立困難者の存在を社会の危機として批判することも、生存保障の観点から現実的ではない。

このような情勢のなかで、冒頭に述べた「子ども」と「社会」をめぐる感覚の歴史性・相対性や社会性・制度性を社会学的視点から検討し、別の年少者と人間関係の図式を示していくことが、開放的な生と社会の理論づくりという観点から実践的にも理論的にも重要に思われた。

(2)学術的背景

もちろん、「社会化」的な図式については、多くの研究者が、その既存秩序への同化志向や大人中心主義などの観点から批判し乗り越えようとしてきた。しかしながら、その乗り越えの図式も、「子ども」とその処遇が、仮に既存のものより子ども中心で非教育的でさえあれば、よりよい社会の構築につながるという前提を乗り越えておらず、批判の対象と大同小異のものになりがちであった。このようななかで、繰り返される図式そのものを問い直していく理論的資源を明示的に提示していく必要があると思われた。

(3)研究代表者のこれまでの研究

このような背景認識は、研究代表者のこれまでの研究の過程で明確に見えてきたものである。研究代表者は、多様な言説資料から、この「社会化」的な感覚の成立と揺らぎを近現代日本の歴史的な文脈に位置づけ、内部から脱構築する作業を行った(元森絵里子 2009『「子ども」語りの社会学』)のち、戦前期を中心に、一定の範囲の「子ども」観が年少者保護の核となる諸制度を形作る一方で、まったく異なる年少者像がときに衝突しながら併存したことを描く年少者像の複数性の記述を試みた(元森絵里子 2014『語られない「子ども」の近代』)。その際に、理論資源として、ニクラス・ルーマンやアラン・プラウトの議論を参照してきた。

この作業をさらに一歩進め、現実を反映しているわけでもなく、多様な実態があるにもかかわらず、言説と制度の上で、「社会化」的な図式が強固に広まっているのはなぜかを説明する、モダニティと「子ども」に関する理論枠組みを洗練させると同時に、さらに経験的な研究を重ねていく必要があると思われた。

2. 研究の目的

本研究は、以上の社会的・学術的背景とこれまでの研究の延長線上に、これらの作業を理論枠組として洗練させ、現代的状況の分析へと架橋するべく構想されたものである。

本研究期間では、経験的研究においては、近代日本において一度制度的にできあがった「社会化」的な制度と言説の布置が揺らぐ時期として、総力戦期と現代の子ども観と子ども処遇のあり方を具体的に分析することを目的とした。理論的研究においては、1990年代末以降の英国の子ども社会学の動向の紹介と批判的検討を行い、経験的な研究と併せて理論化を進めていくことを目的とした。

3. 研究の方法

(1)経験的研究

ここまで述べてきた「社会化」な図式を前提とした知と制度と実践の網の目がある程度確立された後に、その再編が試みられている時代として、総力戦期をとりあげ、学徒勤労動員と学童集団疎開の際に、子どもの能力と既存の教育や児童保護の制度との関係がどう調整されたかを、制度史料と言説資料から明らかにする。

同様に、戦後社会を通してより一層強固となった図式が内部から批判された1980年代以降の状況に注目し、子ども中心、子どものため、子どもの権利、遊びなどの新しい価値を掲げる市民活動が、住民や民間の活用した地方自治(NPM)の空間のなかで、何をどう再編し・再編しきれていないのかを、活動の参与観察や聞き取り、言説史料の分析から明らかにする。

(2)理論的研究

英国の新しい子ども社会学から子ども研究のニューウェーブへという研究潮流の紹介と批判的検討を行い、研究代表者の既存研究及び並行して行う上記の2つの「再編期」の事例研究と重ね合わせることで、「子ども」のモダニティを見る視角を練り上げる。また、歴史研究にお

いて、このような実態と言説の交錯をどのように描き記述を行うのかという、社会記述の方法についての考察も行う。

4. 研究成果

(1)英国の子ども研究の潮流の紹介と検討

研究初年度が本務校の制度である在外研究に当たったことと、依頼原稿等のチャンスがあったことにより、当初の計画よりも理論的な検討が先行して行われることとなった。

子ども研究のニューウェーブの重要書籍である Prout, A. 2005 *Future of Childhood* (Routledge)の翻訳出版を行った(その他(1))。詳細な訳注と解題を付したことで、出版後2年間で子どもに関わる研究者に読まれ、静かに新しい研究動向を生みつつあると自負する。

日本教育社会学会および日本子ども社会学会にて執筆チャンスを得たことにより、英国の動向を批判すべき点も含めて紹介しながら、子どもの近代や現代を考えるにあたって、1980年代から90年代に流行したような「大人の抑圧/子どものため」といったに功対立的な図式ではない、新たな研究視角が必要なことを主張すると同時に、具体的例を見せることができた(図書(1)、雑誌論文(3))。現在新たな編著(『子どもへの視角(仮)』)も準備中である。

(2)子どもをめぐる言説・制度・実践の再編期の経験的研究

学徒勤労動員と学童集団疎開の際に、戦況と、子どもの身体や能力のリアリティと、すでにできあがった学校や児童労働禁止の諸制度がどう調整され、労働力と集団生活への隔離と足手まといとしての親元残留が決定されていったかを制度史から追ひ、方法論的検討とともに報告した(学会発表(1)(3))。現在、早期論文化を目指している。

プレーパーク、こども議会、こどもファンド、こどものまちなど、「遊び」や「子ども参画」といった対抗的な価値を掲げて流行している活動の視察を重ね、特に港区のプレーパークについて具体的な調査を行った。もはや対抗的価値は体制内化され、子ども中心の住民主体の活動を行政が旗を振って依頼する時代である。対抗的な実践の可能性とばかり読み解けない錯綜した現代の状況を描き出すことで、新たな子ども観と強固に構築された近代的言説や制度のせめぎ合いを、方法論的検討とともに描き出した(学会発表(2)(6))。これも論文化の予定である。

これらの2点に加え、貧困や地方農村部などの、典型的子ども期から外れる子ども観が、いかに典型的子ども観と衝突したりしなかったりしているのかを描く作業が加わった(雑誌論文(1)(2)学会発表(5)図書(2))。これらを総合し、次のステップの研究へと進める予定である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

(1)元森絵里子 2019 「角兵衛獅子の復活・資源化から見る子ども観の近現代 村ノ地域社会と近代的規範の交錯」『ソシオロゴス』43(掲載決定、査読あり)。

(2)元森絵里子 2019 「角兵衛獅子はいかにして「消滅」したか 「近代的孩子観の誕生」の描き直しの一例として」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』152: 1-39.

(3)元森絵里子 2018 「モダニティと複数形の「子ども」 特集「子どもらしさ」へのアプローチ3 「多様な子ども」のねらいに代えて」『子ども社会研究』24: 7-22.

(4)MOTOMORI, Eriko 2018 "Sexual Bodies without Free Will: Lack of Discourse on Children in Arguments about Teenage Prostitution in Prewar Japan," *The Meiji Gakuin Sociology and Social Welfare Review* 150: 77-105.

(5)MOTOMORI, Eriko 2018 "Beyond the Dichotomy between Adults' Control and Children's Agency: The Birth of the Pendulum in Prewar Japanese Writing Education," *The Meiji Gakuin Sociology and Social Welfare Review* 149: 195-220.

(6)MOTOMORI, Eriko 2017 "Why Can't We Drink? Understanding the Ambiguity in the Adult-Child Distinction in Modern Japan by Looking at a Half-Century Discussion on the Minimum Age Limit for Drinking " *The Meiji Gakuin Sociology and Social Welfare Review* 147: 37-57.

[学会発表](計8件)

(1)元森絵里子 「「子どもの誕生」再考(2) 戦時動員・疎開における近代的孩子観と身体のリアルの交錯」日本社会学会第91回大会(2018年9月14日、甲南大学)。

(2)MOTOMORI, Eriko "How Can Adults Realize Children's Agency in Liquid Modernity?: Challenges of Adventure Playgrounds in Urban Tokyo" XIX ISA World Congress of Sociology (18 July 2018, Toronto).

(3)MOTOMORI, Eriko "Hindrane or Manpower?: The Intertwining of Material Bodies of and Discourses on Children in Wartime Mobilization and Evacuation in Japan" 13th Conference of the European Sociological Association (31 Aug 2017, Athens).

(4)元森絵里子「「子どもの変容」から「子どもの多様性」へ? : 2000年代以降の子どもへのまなざしの変化と子ども研究」日本子ども社会学会第24回大会(2017年7月2日、東京学芸大学)。

(5)MOTOMORI, Eriko "How Do Japan Forget Diverse Childhoods?" Joint East Asian Studies Conference 2016 (7 Sep 2016, London).

(6)MOTOMORI, Eriko "How Do Adults Realize Children's Freedom in Modern Settings?: A Case Study of the Japanese Adventure Playground Movement" 3rd ISA Forum, International Sociological Association (11 July 2016, Vienna).

(7)MOTOMORI, Eriko "Beyond the Dichotomy of Adult-Control and Child-Centered: A Struggle from Historical Sociology of Childhood" CHILDHOOD, EDUCATION, AND YOUTH IN PRE-1945 JAPAN - AND BEYOND (Workshop) (23 Nov 2015, University of Manchester).

(8)MOTOMORI, Eriko "Seeing Heterogeneity of Childhoods: A Historical Analysis on Multitiered Discourses on Juvenile Protection Systems in Japan," 12th Conference of the European Sociological Association (26 Aug 2015, Prague).

〔図書〕(計2件)

(1)元森絵里子 2018「子ども観の変容と未来——子どもの多様性発見の時代, 子ども社会学は何を問うべきか」日本教育社会学会編(稲垣恭子、内田良責任編集)『教育社会学のフロンティア2 変容する社会と教育のゆくえ』岩波書店, pp.189-208.

(2)相澤真一・土屋敦・小山裕・開田奈穂美・元森絵里子 2016『子どもと貧困の戦後史』青弓社(「大人と子どもが語る「貧困」と「子ども」——どのようにして経済問題が忘れられていったか」担当, pp133-162)。

〔その他〕

翻訳

(1)アラン・プラウト(元森絵里子訳) 2017『これからの子ども社会学: 生物・技術・社会のネットワークとしての「子ども」』新曜社。

学術エッセイ

(2)元森絵里子 2019「近代以降、「子ども」はどう捉えられてきたか」『ASSEMBLY』(京都ロームシアター) 3: 15-18.

辞典項目

(3)元森絵里子 2018「歴史社会的アプローチ」日本教育社会学会編『教育社会学辞典』丸善出版, pp.220-221.

取材・インタビュー

(4)元森絵里子談「18歳成人」に思う 自立支える仕組みを」『毎日新聞』2018.6.14.

(5)元森絵里子談「なぜ20歳未満禁酒? 「大人の線引き」20歳維持の背景」(こちら特報部)『東京新聞』2018.4.15.

(6)2017「トランジション(Transition)=移行~現代社会が抱える課題は、子どもから大人への移行期にあり」元森絵里子×五十嵐隆」『こども環境学研究』13(3): 95[6]-86[15].

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。